

# グローバル化と看護教育

## －多文化共生と社会文化的能力の育成－

高橋 幸子<sup>1)</sup>

Sachiko Takahashi

新型コロナウイルス感染症の収束はまだ宣言されていないが、コロナ禍初期のころと比べると、この新型感染症に対する人々の意識は、だいぶ様変わりをしてきたようである。2020年のコロナ禍では、人と人の直接的な関わり合いは遮断されたが、皮肉なことに、この間に、インターネットを利用したオンライン教育が飛躍的に成長した。一回クリックするだけで、世界に繋がるようになった今、グローバル化という語はコロナ禍以前より気軽に使う言葉になってきている。本稿では、看護におけるグローバル教育について、「グローバル化の中での多文化共生」と「社会文化的能力の育成」という二つの観点で考えていきたい。

### I. グローバル化の中での多文化共生

グローバル化(Globalization)という言葉が頻繁に使われるようになったのは、ここ15年ぐらいだろう。以前は、国際化(Internationalization)という語が多く使われていた。InternationalizationのInterは「・・・の間」という意味を作り出す語頭辞である。つまり、Internationalizationは、国と国との関係性を持たせることを意味するが、Globalizationは、世界を地球という一つの共通の場としての動きを示す。世界の動きを身近なものとして表現するときには、Globalizationの方が好まれるようになったのだろう。

“Think globally; Act locally.”「地球規模で考え、地域で行動する」という言葉がある。都市計画の中から生まれ出たものであると言われ、これを最初に提唱した人物はまだ特定されていない。1960～1980年代に市民運動をしていた環境学者のDavid Browerとも、生物学者のRené Dubosとも言われている。情報が一瞬にして流れる現代社会において、説得力のある21世紀的な金言であるが、実は、20世紀に生まれた考え方である。様々な人が違った立場で使っており、逆の意味であるThink locally; Act globally「地域で考え、地球規模で行動する」やThink globally; Act globally「地球規模で考え、地球規模で行動する」という文言もまかり通っているので、どのような立場で発言していくかによって、意味が大きく変わってくる。

---

1) 姫路大学大学院 看護学研究科

日本では、内閣府が2004年に、海外経済との関係において、グローバル化という言葉を使っている。これは、主に90年代の日本経済におけるグローバル化の影響という経済社会の文脈において使用されていた。World Wide Webの普及とともに、グローバル・ヴィレッジ（地球村）という概念が広まったのも、この頃である。文部科学省の取り組みの中で、教育のグローバル化について提言がされたのは、2011年である。この提言書の中では、経済界の動きに触れ、教育界における影響について次のように述べている。

政治・経済をはじめ様々な分野で、グローバル化が加速度的に進展し、ヒト、モノ、カネが国を超えて、一層流動する時代を迎えている。（文部科学省、2011）

一方、地域でのグローバル化については、1980年代後半より、国際交流や国際協力という形で推進されてきて、海外と日本の地方自治体交流も活発になってきた。教育分野では、初等・中等教育でのALT教員という形で始まった外国青年招致事業（JETプログラム）が、日本全国の各地域で実施され、世界と日本各地域との繋がりを持たせるきっかけとなった。1990年代以降になると、外国人住民数が急激に増加してきた。それと共に、多言語・多文化を持つ人々が互いの文化的差異を認め合い、対等な関係を築き、地域社会の構成員として共に生きていく「地域における多文化共生」という考え方が浸透してきた。島国・日本に住む人々が、これまで経験したことのない速度で、多言語多文化の人々と共存していくという動きが始まったのである。

## Ⅱ．社会文化的能力の育成

自分たちが住んでいる地域の中に、自分たちとは違った言語を話し、違った文化を持つ人が存在している。遠くにあると思われていた世界は、今や、私たちのすぐ身近にある。看護師は、患者にとって最善の看護を提供するのであるが、今後の医療現場では、多言語多文化を持つ患者が増えていくと想定しなければいけない。看護の知識・スキル・態度だけで、対応できるわけではない。ヒト型ロボットでも、看護に必要とされる知識・スキル・態度をインプットすれば、患者への対応がある程度できるかもしれない。しかしながら、ヒトはロボットと違った能力を持つ。ヒトには、ロボットが得意とする翻訳ツールだけでは解決できない潜在能力が秘めている。インターネットやSNSが発達した現代では、検索すれば、ほとんどのことが調べ出すことができるが、検索するヒトの「気づき」がなければ、検索語を入力することはできない。その気づきとは、単一の言語・文化の中ではなかなか育成できないヒトが持つ社会文化的能力であろう。

同じ言語を共有していても、年齢・性別・社会的経済的地位のために、特定の文脈を全く違った解釈をする場合がある。多言語・多文化という負荷を加わった場合、その解釈の難しさは何倍にもなる。社会文化的能力を発達させるということは、文化的感受性を発達させるということである。自分の文化の方が他の文化より優れていて好ましいと考えることなく、異なった文化を受け入れる準備があるという

ことである。文化的感受性には、異なる価値観・態度・信念・習慣があることを認識し、適応性があり、柔軟で受容的であることも含まれる。Straffon (2003) は、異文化間感受性とは、文化的な違いや他の文化圏の人々に対するさまざまな認識に対する人の反応を示すと述べている。

すべての人に、平等に、最大限の看護をするということは、文化間の違いを認識したうえでの対応が必要であるだろう。異なる文化を持つ患者を対象とした研究は少ないようであるが、今後、地域社会のマイノリティとなっている人々の声に耳を傾け、社会文化的能力の育成という視点から、異なった文化間での看護の現状を明らかにすることは意味があると考えられる。それは、看護職に就く者が自身の社会文化的背景を再認識することでもある。

## 参考文献

外務省：欧州評議会の概要, <https://www.mofa.go.jp/mofaj/files/100121368.pdf> (2022年10月1日閲覧)

文部科学省：2011年，初等中等教育局国際教育課外国語教育推進室 国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策～英語を学ぶ意欲と使う機会の充実を通じた確かなコミュニケーション能力の育成に向けて [https://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2011/07/13/1308401\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2011/07/13/1308401_1.pdf) (2022年10月1日閲覧)

内閣府：平成16年度年次経済財政報告，日本経済とグローバル化, <https://www5.cao.go.jp/j-j/wp/wp-je04/04-00301.html> (2022年10月1日閲覧)

National Association of Social Workers. (2005). Cultural and linguistic competence in the social work profession. Retrieved October 1, 2022 from website <http://c.ymcdn.com/sites/www.naswnyc.org/resource/resmgr/imported/Cultural%20and%20Linguistic%20Competence%20in%20the%20SW%20Profession.pdf>

総務省（自治省）：1987年，地方公共団体における国際交流のあり方に関する指針 [https://www.soumu.go.jp/kokusai/pdf/sonota\\_b8.pdf](https://www.soumu.go.jp/kokusai/pdf/sonota_b8.pdf) (2022年10月1日閲覧)

総務省：2016年，情報難民ゼロプロジェクト報告 [https://www.soumu.go.jp/main\\_content/000456319.pdf](https://www.soumu.go.jp/main_content/000456319.pdf) (2022年10月1日閲覧)

総務省：2022年，防災基本計画 第1編 総則，第3章 防災をめぐる社会構造の変化と対応 [https://www.bousai.go.jp/taisaku/keikaku/pdf/kihon\\_basicplan.pdf](https://www.bousai.go.jp/taisaku/keikaku/pdf/kihon_basicplan.pdf) (2022年10月1日閲覧)

Straffon, D.A. (2003). Assessing the Intercultural Sensitivity of High School Students Attending an International School. *International Journal of Intercultural Relations*, 27, 487-501. Retrieved October 1, 2022 from [https://doi.org/10.1016/S0147-1767\(03\)00035-X](https://doi.org/10.1016/S0147-1767(03)00035-X)